

## 個人

## 石巻で出会った人たちは、わたしの宝物。

札幌市

有坂 美紀 個人

取材日 2012.07.31

「生き物が大好き！」との思いから大学院で海洋生物を研究した後、水産新聞の記者を経て、オーストラリアへ。帰国後2012年までEPO北海道で持続可能な社会を目指して活動した。東日本大震災後、「ブラキストン線を越えよう！プロジェクト」を立ち上げ、北海道で震災に関する情報発信を行ない自身も積極的に被災地へ通った。

## 現地での支援活動に取り組む きっかけは一本の電話

「支援活動を手伝ってほしい。」

震災から3週間ほどたった4月初旬、知人から一本の電話があった。電話をくれた彼らは、スマトラ島沖地震の津波被災者を支援するためにNPO法人アプカスを発足させ、普段はスリランカで活動している。そんな中、東日本大震災が起こり沿岸部を大津波が襲った。彼らは自分たちのスリランカでの活動を東北で活かせるのではないかと思い、宮城県石巻市で支援活動をスタートするのだと、その移動中にかけてきた電話だった。

私が所属しているEPO北海道（北海道環境パートナーシップオフィス）でも、震災発生後の錯綜する情報を少しでも見やすく届けたいと思い、東日本大震災に関する特設WEBページ「ブラキストン線を越えよう！プロジェクト」を3月21日に立ち上げた。現地で支援活動をする彼らをはじめとした北海道の団体に対して、「人、もの、金」という活動に必要な情報を届けることによる後方支援が、中間支援組織で働く自分の役割であり、それを続けていくつもりだった。

ところが1ヶ月も経過すると、「こちらがやりたいと思っていることと、現地が本当に必要としていることが違うのではないか？」と感じるようになった。支援をしたい側と現地のニーズにズレがあることに気が付いた。被災地の様子を見ずに後方支援をすることは、もう限界だった。

## 被災地を見て決意したこと

前述の知人から「できれば現地に来てほしい」と声をかけられていたこともあり、5月末に初めて石巻を訪れ、南三陸町や気仙沼市本吉町を見て回った。初めて被災地を見た時は、あまりにも甚大な被害に途方に暮れ、「ここで自分にできることは何もない」と無力感に襲われた。それでも、知人やボランティア活動をしている大学生の様子を見て、被災地のために何かできることはないの



かと悩み、自分にできることの答えを出した。ひとつは、これまでと同じように震災関連の情報を伝え続けること。すでにたくさんの方が情報発信を行なっているが、伝える窓口は1つでも多い方が良い。もうひとつは、これまでEPO北海道で携わってきた地域づくりの経験を活かし、被災地でも地域づくりのお手伝いをする事だ。刻一刻と変化する現地のニーズを把握し、自分にできる限りのお手伝いをするためにも、月に一度のペースで北海道から石巻へ通おうと決意した。

## 本当に必要な人へ情報を届けた「かわら版」

収集した情報は被災地で必要としている人に届け、さらに被災地の様子を北海道にいる人たちに発信していこうと考えた。

石巻を訪れては災害復興支援協議会の定例会議に参加して、支援活動や避難所の様子、課題になっていることなどの情報を他団体やボランティアの方々から収集し、その時点での動きを把握した。また、石巻市役所へ行き、市役所職員の方から支援や復興計画についての情報を聞き取った。特に復興計画に関しては、自分たちのことで手一杯な地元の方々が見逃さないようにと目を光らせた。地域の未来を決める重要な計画が、地元の人たち

の知らない間にできてしまう事態を避けたかったからだ。

2011年9月頃には、支援のばらつきをなくそうとNPO法人いしのまき環境ネット（所在地：石巻市）とNPO法人アプカスとともに「かわら版」を発行した。在宅避難者や小さな規模の仮設住宅には支援情報が届きにくく、情報が得られないために支援を受けられない状況もあった。支援情報だけでなく、明るくなれるニュースを市や新聞社のWeb-siteからピックアップして掲載した。かわら版は、支援が本当に必要な人を探し出し、地域のニーズを拾うために門脇浦屋敷地区の家を一軒一軒訪問して配布した。すると口コミで広がり欲しいという要望も出てきたので、地域の世話人にまとめて渡すことで、より多くの人へ配布してもらうことが可能となった。2011年9月から12月にかけて、計6回のかわら版を発行した。

## 地域の未来を考える 「お茶っこサロン」

2011年秋には、浦屋敷地区にNPO法人いしのまき環境ネットが地域の方々が交流するための「お茶っこサロン」をオープンした。サロンでは、石巻市の歴史家を講師に招いた学習会も企画した。地域の人たちにこれからのまちづくりを考えてほしかった。そのためにはまず地域を知り、自分たちが住む石巻をもっと好きになってもらう必要があると考えたためだ。参加者からは「生きがいを感じられる町にしたい」「津波を海で止める方法はないのか」といった意見が飛び交った。さらに、石巻市の復興計画に対して地域として意見を出してもらうことを目指し、地域の課題と未来を考える続編のワークショップを開催した。当日は約20名が参加し、地域の課題や未来への関心の高まりが感じられた。この様子は地元の日日新聞社に掲載され、地元の人たちの更なるやる気を呼び起こしたのではないかなと思う。

地域としての意見を行政に届けるまでには至らなかったものの、参加してくれた方の中には「町は行政がつくるのではない！自分たちがつくるのだ！」と、復興計画に対するパブリックコメントを出した人もいた。地元の人たちがこれから自分たちの地域をどのようにしていきたいかを考える、そのきっかけ作りをお手伝いできたのかなと感じている。

お茶っこサロンは年内で終了したが、震災前は2～3軒隣までしか知らなかったご近所同士の関係も、サロンを通してエリアを超えた交流へと広がり、今でもお茶っこする関係が続いている。お茶っこサロンは地域の交流の場として役に立てたのではないかなと思っている。

## 思い出の写真展

2012年2月、石巻で加藤登紀子さんの慰問ミニライブが開催された。加藤登紀子さんは歌を通して被災者の心身のケアをするため、何度も被災地を訪れている。会場の準備は地元の人たちの手であつという間に終わり、お母さんたちが得意料理を持ち寄ってお汁粉やドーナツを用意してくれた。ミニライブが始まるのを楽しみに待っている来場者に、お母さんたちがはりきってお汁粉を配る様子を見て「女の人たちのパワーってすごいな」と感じた。

このミニライブに合わせて写真展を開催した。ライブが行われた浦屋敷地区は、運動会や敬老会などの地域行事が30年以上続く自治会が活発な地域だった。会場となった会館に保管されていたアルバムには、運動会や川開き、婦人会の集合写真など地域の思い出がたくさん詰まっていた。しかし、津波を被ったまま放置されていた。もちろん、地域の人是个々の生活を考えるのがやつとの状態であり、地域の思い出を振り返る余裕はなかった。ただ、そのままではせつかくの写真が台無しになってしまうし、地域の思い出も消えてしまう。楽しい時を思い出せば、地元の人たちが「よし！もう一度自治会を皆で頑張ろう！」と奮い立ってくれるのではないかと考えた。

NPO法人いしのまき環境ネットを通じて自治会長さんに写真展開催の了承を得た時、会長さんは写真洗浄を他の団体のボランティアさんに依頼してくれた。きれいに洗浄された比較的状态の良い写真をピックアップし、引き伸ばしてライブ会場へ続く階段に展示した。展示の準備は、地元の人たちも協力してくれた。当日、写真の前では昔話に花が咲いていた。展示した写真の中には、津波で亡くなった方の楽しそうな笑顔が写っている。「この時すごく楽しくてね。もう一度、この地域



撮影：2012.2.12 石巻市浦屋敷地区で開催された写真展

で運動会をやりたいわ」と、微笑みながら涙を浮かべる姿に、こちらまで目頭が熱くなった。この写真展を企画して本当に良かったと感じた。

## 東北での学びを北海道に伝えたい

これまで被災地を見てきて、コミュニティのあり方によって復旧・復興のスピードや質が違うことを知った。震災で受けた被害を無駄にはしたくない。東北での学びを北海道に伝えて活かさなければと考えた。

そこで、EPO北海道が主催となり、地域ESD（持続可能な開発のための教育）学び合いフォーラム「震災から考えるコミュニティのあり方」を開催した。基調講演には気仙沼市教育委員会の伊東毅浩氏を講師として招き、震災で気づいた日頃のESD活動の重要性と地域のつながりについてお話してもらった。気仙沼市はESDを積極的に推進していて、震災時はESD活動を通して築いたネットワークが活かされ、いち早く支援や協力を得ることができた。日頃からのコミュニティ形成がいかに重要であるかを大震災で学んだ。

伊東氏から「せっかく北海道を訪れるので、学校でも講演をしたい」と相談をいただいた。そこで、札幌市内2箇所の中学校で、出前講座「命の授業」を企画した。「命の大切さ」や「自分と他者とのつながり」などを一緒に考える趣旨の授業だ。最初は面倒そうな様子で座っていた男の子も、だんだんと真剣になっていく。泣いている子もいた。中学生にとって東北は遠く、どこか他人事の問題だったかもしれない。経験者による大震災の生の声を聞くことで、命について、家族や友人の大切さについて考えるきっかけになったと思う。

## 被災地を忘れない

支援する立場としては、被災地が自立して復興していくことを阻害するような支援をしてはならないと思っている。地元の人たちが本当にやりたいことの中で、自分がお手伝いできることをやろうと、地域の人たちの声を聴くことを心がけてきた。お茶っこサロンも写真展も、地域の人たちの声を聴くために行なった側面がある。振り返れば、「支援したい、被災地のために何かやりたい」という気持ちを受け止めてくれる地元の人がいるから、私たちは支援活動ができるのだと思う。受け入れてくれる人たちがいて支援活動ができることをありがたいと感じるし、押しつけの支援や独りよがりの活動になっていないかと疑心暗鬼になる心が少し楽になる。

活動をする中で、自分には一体何ができるのだろう、石巻の人たちのために何かできているのだろう



情報紙「かわら版」を一軒一軒訪問して配布した

うかと悩んだ時期もあった。ある時、地元の方に「毎月石巻に来てくれて、それだけ気にかけてくれている人がいるってだけで心強いよ」と言われた。何をしなくても石巻を訪れるだけで、被災地を気にかけていること、震災を忘れていないことを体現してくれているのだと。被災地を忘れないでほしいと思っている東北の人が大勢いる中、他地域から被災地を訪れることは、それだけで地元の人に「忘れてないよ」と伝えることに等しい。そしてそれが心の支えになり、元気づけることにもつながっていく。それだけでもいいのかと、ふと肩が軽くなった気がした。今も地域の様子を見るため、そして何か困っていることがないか、自分がお手伝いできることはないかを探しに石巻に来ている。

## 石巻の人たちは「お隣さん」

この支援活動を通して石巻でできた関係は、生涯続くだろう。もしも私が毎月石巻を訪れなくなって、コンスタントに会わなくなったとしても、ずっとお互いに相手を気にかけていられる関係になれたと思っている。石巻に来ると地域のおばちゃんが「また来たの！お茶っこ飲んでかいん」と声をかけてくれる。その触れ合いにほっとするし、石巻は私のコミュニティの1つだと感じる。石巻と北海道の距離は遠いけれど、心の距離はまったくない。

たまに石巻を訪れて、地元の人たちとお話したり、一緒に何かを作ったり、一緒に考えたりすることが大事だと思っている。これからも地元の人たちが「やるぞ！」と何か始めようとした時に当然のようにお手伝いするつもりだ。石巻で出会った人たちは、わたしの宝物であり、いつでも「ただいま！」と言える感覚で今後も付き合っていけたら幸せだと思っている。